

24 『名家灸選』所収の「試効」の灸法に みる施灸数

鶴田泰平

『名家灸選』(文政十年〔一八一三〕刊)は、江戸後期の医家・浅井惟亨(二七六〇〜一八二六、名は惟亨・字は子元、号は南圃)の著した灸法の専門書である。

『名家灸選』の構成は、その内容を上部病・中部病・下部病・緩治病・急需病・瘡瘍病・婦人病・小児病・雑症・附録敷灸の十類に分類し、その十類をさらに四十の病症項目に分けている。この十類四十病症項目に対応する治療法として、百三十三法の灸法が所収されており、その殆どに出典書名や個人の伝などの典拠名が表記されている。それらの典拠の種類としては、漢籍(十六書四十二灸法)、国書(三書十九灸法)、伝(十二名目二十九灸法)と、著者の浅井惟亨自身が実際に試みて治療効果を確認したものとして「試効」(△しこう)もしくは「ここ

ろみてこうあり」(三十九灸法)がある。なかでも単独の典拠として最も灸法数の多いものが「試効」であり、全灸法の二十九・三パーセントを占めている。

諸々の鍼灸書や医方書に記載されている灸法の施灸数の大多数が、その決定の背後に陰陽論があると言われている。陰陽論は、物事を陰と陽に分類して思考を進めていく理論で、陰陽に二分する為の前提として、あらかじめそれぞれの理屈をもって、陰の要素、陽の要素が象徴的に指定されている。このことは数においても同様で、大まかには偶数は陰、奇数は陽に位置付けられている。

今回の調査では、著者の浅井惟亨が灸治療を行った際に、施灸数をどのようにとらえていたのかを推測することを目的として、「試効」と表記された灸法の施灸数を分類・統計し、陰陽論との関わりを考察した。

「試効」と表記された三十九灸法の条文中に見られる施灸数と登用回数は次のとおりである。

- ・一壮(一回)・三壮(四回)・七壮(五回)
- ・十壮(三回)・二十七壮(一回)・十五壮(三回)
- ・三五壮(一回)・二十一壮(二回)・三十壮(一回)

- ・五十壯(六回)・百壯(三回)・三五十壯(二回)
- ・五百壯(二回)・千壯(一回)
- ・壯数多々(一回)・常々不断(一回)
- へ・施灸数記載無し(十灸法)

これらの施灸数を見ると、最も多く登用されている壯数は五十壯、次に多いものが七壯、続いて三壯、十五壯、十壯、百壯が多い。なお、施灸数の中の「二十七壯」は二十七壯のことではなく、七の二倍の十四壯、「三十五壯」は三十五壯ではなく、五の三倍の十五壯のことであり、同様に「三五十壯」は百五十壯のことであると思われる。

記載されている施灸数を検討してみると、全ての施灸数が陽の数である奇数、もしくは奇数を約数に持つ数であり、陰の数である偶数のみを約数として持つ数は用いられていないことがわかった。このことから、浅井惟亭が自らの経験として効果を得た「試効」の灸法を記載するにあたり、「体の虚(気の不足)したところを補う(温める)」、あるいは「陽気を補う」といった治療目的を示すうえで、施灸数を陽の数である奇数を中心として考

え、十、十四(二七)、五十、百、百五十(三五)、五百、千といった偶数を用いる場合であっても、あくまでも奇数の倍数としての認識をもって取り上げていたことが推測される。

以上より、浅井惟亭が灸治療を行い、施灸数を考慮する過程において、少なからず陰陽論を基底とした思考を展開していたことがうかがえた。

(日本鍼灸研究会)